

1泊2日の予定であったため着替えの準備もせず、同僚の国場保氏とともに多良間島へ向かったことが、今回のオウシマダニ撲滅への1歩であったとは予想だにしませんでした。

多良間空港へ降り立つが早いのか、待機していた役場職員の波平敏一氏の案内で牛の死体がゴロゴロころがっているS牧場へ直行しました。血色素尿が見られるという稟告から、バベシア病を想定して解剖を始めたのも束の間、あるはずの脾腫が見られず、さらに死後数時間経過していたはずの牛の体温が異常に高く、かつ凝固しない血液がおびただしく流れ出る事態に炭疽、破傷風、中毒などの病名が頭の中をはげしく駆け巡ったものです。同様の牛の死亡が島内の数カ所の牧場でも発生していることも判明しました。島内のどの施設にも顕微鏡はおろか染色液もなく、まんじりともしない夜を過ごしました。顕微鏡セットは翌日の昼過ぎに届いたものの、死亡牛の発生状況調査と解剖に追われ、次々と発生する牛の死亡に手の打ちようがないまま長い時間が過ぎていきました。解剖したほとんどの牛で、教科書に記載されている脾腫は見られず、内部臓器の広範な出血、血液の凝固不全、膀胱内の正常色の尿等が我々を悩ませました。さらに甚急性に訪れる死と死亡直前に見られる歩様創痕、流涎、高熱等の症状にウイルスの専門家である国場保氏は長い眠れない夜を過ごしたようです。この奇病の原因がバベシア ポピスによるものであることが判明したのは、その日の夜おそくでした。翌朝、早速ガナゼックを手配してもらったものの、必要とする量のガナゼックが届くまでに多くの牛が犠牲になった無念さは今でも忘れることができません。

現場を仕切っていた友利和博氏に「お前達はバカか」とどなられながら、そしてそんな光景をにやにやしながら見ていた内間信好所長の統率の下にバベシア病が鎮圧されるまでに1週間が経過し

ました。その最中、ブルドーザのように仕事をこなした仲本善訓氏や外見とは似合わない繊細な手つきで病牛の治療をしていた玉寄弘氏達と初めて共に汗を流した良い思い出が残っています。1泊2日の予定であった出張が1週間以上にも及び、汗が染みついた作業服が犬も避けるほど臭くなった頃、役場の女性職員が大変綺麗に見えたのは私だけではなかったはずである。

帰りの飛行機の窓から、もう2度と訪れることはないだろうという感傷に侵りながら多良間島を眺めていると、隣席にすわっているでっぴりとしたオバーチャンに「兄さん臭いけど牛を買いに来たのねえ、私は那覇から頼まれて来たけど、この島の牛の病気は私が拜んで追っ払ったからもう大丈夫さあ」という内容のおしゃべりを聞かされ、そのキラキラした瞳にユタの信念の強さを見た思いがしました。

ブルドーザのような仲本善訓氏からバベシア病に関するレポートが届いたのは、多良間島での悪戦苦闘の余韻がまだ醒めやらぬ頃でした。そのレポートはB4罫紙の10数枚にもおよび、現場で我々を悩ました脾腫の見られないバベシア病、血液凝固不全、内部臓器の広範な出血、流涎、歩様創痕等の原因についてかなり突っ込んだ考察がなされていました。いいレポートでした。今でも私の書庫に保管されているそのレポートを見るたびに、甘酸っぱくもほろ苦い思いが走馬灯のようによみがえってきます。

多良間島で肌で感じた島民性、牛の飼養規模、家畜保健衛生所職員のチームワークの良さ等々は絶好の環境でした。そうです、オウシマダニを短期間に清浄化する理論を実践するにはこの上ない状況でした。何度も検討した割には、なかなか信じてくれる人が少なかったダニ清浄化に関する理論的根拠を、この時ばかりと宮里松善場長に提出し判断をおおぎました。数時間後、場長室へ呼び

出され「やってみろ」と言われた時には、嬉しさよりも逆に、しでかした事の大きさに心が大変重くなってきたのを覚えています。数日後、宮古家畜保健衛生所でオウシマダニが短期間で清浄化が可能である根拠を説明し終え、その場で多良間島でその実践をしたい旨を内間信好所長に申し出ると「予算的な事は自分が考えるから、お前は具体的なダニ駆除推進方法を書いてこい」との友利和博氏の言葉が帰ってきました。これらのやりとりは、おそらく今後もダニ駆除の歴史の中には登場しないと思われませんが、部下を信じて泳がせた、宮里場長や内間所長の度量の広さ、小気味のいい行政的手腕を発揮した友利和博氏は、それまでエンドレスバトルの様相を呈していたダニ駆除事業をゴールの見える事業へと変換させるキーマンであったと評価したら諸賢の失笑をかうであろうか。

このあと、多良間島でのダニ駆除完結への道のり、黒島での抵抗性ダニの出現と話しは尽きませんが、これからの話はまたの機会にゆずることにしたい。

稿を閉じるにあたり、記念誌発行に努力された関係者諸氏に厚く感謝します。

## オウシマダニ撲滅に寄せて



畜産公社  
総務課長 唐 真正 次

昭和40年度は白保牧場の廃牧した年である。なに故、廃牧しなければならなかったか牧ニンジュの無言の抵抗を知りながらも無力な私は最後の薬浴に立ち会っていた。昭和29年に設計された旧薬浴場が消滅すると同時に、この年、高等弁務官資金でFAO推奨の近代的薬浴場が大浜崎原公園内

に第1号として設置された。私の初仕事はこの竣工検査から始まった。その頃からγ-BHC製剤の殺ダニ効果は低下し始めていた。濃度を高めてもダニを殺すことはできず牛が中毒死するだけで効果はなかった。その後ネグホンを使用したけど2～3年で耐性が出来期待するほどの成果はなかった。思案にくれていたやさき、復帰記念事業の一環として牧野ダニ駆除事業が浮上してきた。八重山における牧野ダニ駆除事業の必要性は本土側から見た場合、家畜伝染病予防法上、復帰後本土と同一レベルで家畜の交流を図らなければならないこと、また、八重山から見た場合、本土へ商品として出荷する場合極めて不利な点があることなどから浄化をしなければならぬ行政上の隘路があった。まさに好機到来である。

昭和45年8月27日から9月6日までの間、牧野ダニ駆除事業調査のため日本政府の間邦彦技官が来島された。私はできるだけダニの多数棲息している原野等を案内した。間技官のズボンやワイシャツに赤ダン（幼ダニ）が無数に付着していた。これが幼ダニですと申し上げますと、あなたは指導者として何を指導してきたんだと散々叱られた。後日聞きおよんだところによると、琉球政府の職員は南方ボケしているから喝を入れてこいとの上司命令だったそうです。技術員はダニ撲滅の使命に燃えていただけに措置に反発しましたが、指導に従った。

待望のヘリ撒布が昭和46年6月15日から開始され、薬剤が村落や海岸に飛散しないように朝なぎを利用するためしばしば牧場で寝泊まりすることもあった。これと平行して草地ダニ、牛体ダニの調査を実施し、血液検査のため八重山の肉用牛全頭を採血できたのもアメリカ民事部隊（獣医師1名に助手6名）の応援があったこそで、決して忘れることはできない。血のにじむような努力にもかかわらず時は流れて昭和55年まで八重山のダニは撲滅されていなかった。県では第二次振計で延

長できるか模索をしていた時に間先生が畜産局衛生課の班長になられていた。偶然にも私が沖縄県のダニ担当として先生の助言を受ける事ができた。八重山だけでは弱いので現在ダニが棲息している多良間村、北大東村、伊是名村、伊平屋村等を追加して延長申請しなさいとの御教示をいただいて継続することができた。ダニ撲滅に至るまでには、いろいろな方々のご指導やご協力があってわれわれの長年の悲願がやっと結実することができたことを八重山郡民と、ともに喜びたい。

## ダニ駆除の最終戦



中央家畜保健衛生所  
波平克也

将棋の世界でA級順位戦というのがある。10名のトッププロ棋士による、一年間を通した名誉ある名人位挑戦権の戦いである。毎年雛祭りの日に、その最終決定戦が行われる。将棋界で最も長く熱い一日となる。当時の私はその大好きな将棋の最終戦を観戦するように胸ときめいていた。過去、幾多の先輩が挑戦し、敗れ去ったダニ駆除。それを短期間で完全に撲滅できる可能性が極めて高いのである。技術者として、その渦中に立会いたいと思った。その状況の一部を私見と偏見を織り込み報告したい。昭和59年度に多良間村で、アズントールを使った重点的ダニ駆除事業が成功した。これを受けて、昭和61年度から黒島で本事業が継続的に開始された。組織的な取り組みがされ、その経過も順風満帆にみえた。しかし、予想もしない事態が勃発した。アズントール抵抗性ダニの出現である。「薬が効かない」これは戦争時、鉄砲に竹槍で望むが如きものである。農家、技術員とも

に途方に暮れ、事業が暗礁に乗り上げた感があった。そのような中、ピレスロイド系薬剤バイチコール（以下B剤）のタイムリーな登場である。このB剤の効率的かつ省略的な使用説明を受けた時は、開発したドイツ人の頭脳に驚嘆した。国内、初トライである。

【平成元年度】抵抗性ダニの分布する黒島でB剤を使った組織的ダニ駆除をスタートさせた。従来ダニ法と違って「こんな少量で大丈夫か？」が本音だったと思う。期待と不安の入り交じった1年間だった。

【平成2年度】石垣島周辺の各離島から、段階的に撲滅して行くという壮大な実行案ができた年度でもあった。私は当時、県畜産課衛生係で3年間、本事業を担当し、その状況が把握できる立場にいた。このチャンスを掴みたいと、平成2年4月1日に八重山家保に転勤した。各離島ともに牛体付着ダニは、3回目から肉眼的に確認されなくなった。そのような中、事業終了間際の波照間島の山羊にダニ汚染が確認。「なにー」というのが第一声。さらに、事業終了2ヶ月経過の小浜島の山羊で再汚染が確認される。「またなー」であった。過去、多良間島におけるダニ駆除は山羊は対象外で成功していたのである。同じく、平成2年度事業終了の与那国島の牛で再汚染がある。「・・・」ショックで言葉がなかった。山羊の再汚染の比ではなかった。この事業の困難さを実感し、しばらくは美崎町に通って酩酊していた。技術的な反省点としては①牛と同格で、山羊を対象とすること。②ダニ駆除実施期間を、最低1年間以上は実施すること。この2点であった。

【平成3年度】前年度の再汚染地区の継続と西表島の実施、平成4年度から始まる石垣島の体制づくり等で混乱の多い年度だった。波照間島の再実施説明会で、山羊農家に再び頑張ろうの説明会を実施した時の農家の声。

『去年11月に汚染が確認されたのに、今までにも対策しなかったのは、行政として大きな問題ではないのか?』『今回、再度失敗だったら、どこが責任を持つのか?』『駆除期間が前回は21日間隔で、今回は30日間隔。本当に大丈夫なのか?』等々。批判的な厳しい意見がでる。感情的になったり黙り込んだりもした。目的は一つ。ぶつかることで、お互い理解して取り組むことができた。さらに、西表島の内離島の無人島にオウシマダニが見つかる。この島には、野生の牛がいるとの情報があり、何回か調査に行った。未開発の山林の険しい島だった。牛の所有者が白浜在住の台湾人。国民性の違いがあった。厳しく拒否される。

【平成4年度】10月の事業開始まで、計画は二転三転した。休日や祝日、夜も昼も無かった。公務員らしからぬ(?)激動の1年だった。実施に向けて農家向けの啓蒙用ポスターを作成。16回のダニ駆除実施日を書き入れた地区毎の6種類で「1頭もれなく」のテーマを考えた。このテーマには①牛の個体識別ができるように1頭もれなく耳標や首札の装着をする②確認台帳を1頭もれなく作成する③B剤を1頭もれなくプアオンするという3つの意味があった。供給公社の放牧場で撮った牛の親子の写真を何とか利用できた。

平成4年10月12日第1回石垣島初日。いよいよ始まる。石垣島を6ブロックに分けて月曜日から金曜日までの6日間のローラー作戦で行った。各関係機関で6班(最低3人体制)の18名で実施した。確認者が2人だと確認現場において力関係(年齢や職務上等)で、手抜きになるリスクをより少なくするために、必ず3人体制にした。この日の私は、事業担当者として、最も汚染度の高い地区の平久保牧場に行った。牧場全頭の追い込みと確認が終わったのが、夜9時前。夕方からバケツをひっくり返したような豪雨だった。オウシマダニの神様がいたら、ダニ駆除に対し激怒し

ているかの様に思えた。牧場の暗闇のなか、20台近い車のサーチライトの光とエンジン音。追い込んだ牛に次々とB剤を投与して行った。「こんな大雨のなかで薬は大丈夫か?」という農家の声。私は「油だから雨は弾かれる。絶対に大丈夫だ」と力強く答えた。確信は無かったが、現場の総責任者としては弱音は禁物。パンツの中まで雨でグショ濡れの1日だった。まるで映画の1シーンの様なこの日の情景は、今でもたまたま私の夢の中に現れる。もちろん悪夢として…。関係機関への翌日の連絡と人員配置、車両の手配、B剤の準備、確認札、農家名簿等々毎日、この作業が続いた。そして、第7回目のダニ駆除終了後、平成5年3月31日に私は御当地を転勤した。

フルマラソンを完走後、訳もなく涙が溢れ出る、そんな気持ちだった。ありがとうバイチコール。そして、さようならオウシマダニ。延長戦が無いことを心から祈願して……。

## 第14章 オウシマダニ撲滅記念式典表彰者一覧

農林水産大臣感謝状、畜産局長感謝状、  
県知事感謝状授与者（団体、個人）

### ○農林水産大臣感謝状授与 1 団体

八重山家畜保健衛生所

### ○畜産局長感謝状授与 6 団体

石垣市、竹富町、与那国町、八重山郡農業協同組合、  
与那国町農業協同組合、家畜衛生試験場

### ○県知事感謝状授与 5 団体 6 個人

団 体 石垣島和牛改良組合、竹富町肉用牛生産組合、  
与那国町農協和牛畜産部会、沖縄県農業共済組合連合会  
八重山家畜診療所、八重山猟友会

個 人 山城英文、平安名盛己、多字 正、船道賢範、鳩間一美

物故者 内原英郎

## オウシマダニ撲滅記念誌編集委員

事務局：畜産課衛生係

畜産課副参事兼課長補佐	金 城 英 企	編集委員長
畜産課課長補佐	宮 城 源 市	副編集委員長
畜産課衛生係主任	屋富祖 昇	編集委員
八重山家畜保健衛生所所長	那 根 元	編集委員
八重山家畜保健衛生所防疫衛生課長	上 地 俊 秀	編集委員
家畜衛生試験場研究員	荷川取 秀 樹	編集委員
北部家畜保健衛生所主幹兼防疫衛生課	天 久 勇 市	編集委員
中央家畜保健衛生所主任技師	波 平 克 也	編集委員
宮古家畜保健衛生所主幹兼防疫衛生課長	友 利 和 博	編集委員

オウシマダニ撲滅記念誌

発行 平成12年3月  
発行者 沖縄牧野ダニ撲滅記念事業推進協議会  
沖縄県農林水産部畜産課（事務局）  
〒900-8570 那覇市泉崎1-2-2  
TEL (098) 866-2269  
印刷 株 平 山 印 刷  
〒901-1111 南風原町字兼城270-1  
TEL (098) 889-8748